

イザヤ書 65章 1～5a

ルカによる福音書 8章 26～39節

「墓場から自分の家へ」

<異邦人の地ゲラサ>

前回のルカによる福音書の聖書箇所は、三週間前になりますけれども、イエスさまと弟子たちが船に乗っている時に、大変な突風に遭って危なくなった、ということが語られていました。しかしその時、イエスさまが風と荒波をお叱りになると、静まり、凪になって、みんな助かったのです。神の御子の力を現わされたイエスさまに、弟子たちは恐れ驚いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った、とあります。今日は、その箇所の続きです。

そもそも、どうして皆で舟に乗っていたかということ、それはイエスさまが弟子たちに「湖の向こう岸に渡ろう」と言われたからです。自分のご意志で、イエスさまは弟子たちを連れて船に乗り、湖の向こう側に向かわれたのです。そして到着したのが、今日出て来る「ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方」でした。

イエスさまや弟子たちはユダヤ人ですが、ゲラサは異邦人の地、異教の人々が住む地域です。今日の箇所に「豚」や「豚飼い」が出て来ますが、ユダヤ人は豚を汚れた動物としていたので、そのことからゲラサが異邦人の地であることがよく分かります。この土地に、イエスさまはわざわざ舟に乗って出向かれたのです。

<悪霊に取りつかれた男>

さて、イエスさまが陸に上がられると、悪霊に取りつかれている男がやってきました。

この男は、長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた、とあります。もちろん、かつては家に住んでいたのです。でも、何回も悪霊に取りつかれるので、家にいる時は鎖で繋がれ、足枷をはめられて監視されていました。しかし、それを引きちぎっては荒れ野へと駆り立てられていた。鎖を引きちぎるほどの力です。周囲の人々も身の危険や不安を感じたに違いありません。実際に人に危害を加えたかも知れません。はじめは男の体を自由に動けないようにして、何とか行動を抑制して、町で家に住んで共に生きていた。でも、それさえも出来なくなりました。それで、男は一人、墓場に住んでいたのです。

墓場は、日本のような、穴を掘った上に石を置くようなお墓ではありません。岩などに横穴を掘ったようなものです。ですから、そこに入れば雨露を凌ぐことは出来たのです。

そこは死んだ者が置かれる場所であり、もちろん生きている人が住む場所ではありません。しかし男は、町や家の人々との関係を築くことが出来なくなり、共同体の交わりの中で生き

ることが出来なくなり、もはや死んだも同然でした。そして、まさに死者の場所である墓場にしか、居場所がなかったのです。

この男は、現代で言えば、重い精神病の人なのだろうという人がいます。でも、この男の状態を、わたしたちが知っている病名で説明することには、意味がありません。聖書はそういうことを伝えようとしているのではないのです。

ここでは、悪霊が圧倒的な力で男を支配しており、男は何のなす術もないことが語られています。悪霊は、名を「レギオン」と名乗りました。「たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである」とあります。レギオンは、ローマ帝国の軍隊の単位で、五千～六千人の部隊のことです。六千。大変な数です。そんな大軍が、一人の男の中に入って支配していたというのです。単純に考えても、一対六千。一人の男にまったく勝ち目はありません。

しかし人は、そのような恐ろしい力に、人は自分を空け渡してしまうことがあります。そして、それはもはや、自分の力では太刀打ち出来ないような力でわたしたちを支配する、ということなのです。

人間は、命を創造し、養い、導いて下さる神さまとの関係の中で生かされ、歩いていく存在です。しかし、わたしたちには罪があり、神さまから離れたり、背いたりします。神さまに従うのではなく、自分の願いや欲望に従いたいと願います。そうして、神さまとの関係を拒否し、神さまから離れた途端に、わたしたちは神さまではない、他の多くのものに支配され始めるのです。罪の支配の中に、いとも簡単に自分を委ねてしまうのです。

たとえば、マルコ福音書（7：21～22）には、人間の心から出てくる「悪い思い」のリストが載っています。それはみだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口（あっこう）、傲慢、無分別…と書かれています。

あんな奴いなければいいのに、と思ったことはないでしょうか。それは殺意です。なぜあの人ばかり良い思いをするのか、と思ったことはないでしょうか。それはねたみです。他の人と比べて自分はマシだ、と思ったことはないでしょうか。それは傲慢です。

わたしたちの心には、たくさんの悪い思いがあります。外からの誘惑も、たくさんあります。わたしたちは、それらに支配されるや否や、四六時中そのことばかり考えてしまう。そのうち、思いは膨れ上がり、わたしたちを引きずり回し、荒れ野へと駆り立てます。人を傷つけたり、自分を追い込んだりするのです。

これは、ある一人の、運が悪い、可哀想な病気の男の話ではありません。わたしたちだって、神さまから離れた途端に、自己中心的な思いや、悪い思いや、誘惑に捕らえられて、それらが圧倒的な力で心を支配し、いつの間にか自分ではどうにもなくなり、破滅へと向かってしまうような存在なのです。

### <イエスさまのご支配>

しかし、この男のところに、イエスさまが来て下さいました。向こう岸から、嵐の湖を渡って、来て下さいました。悪霊に取りつかれた、異邦の地の、一人の男を救うためにです。

男が自分でイエスさまを呼び求めたものではありません。でも、イエスさまは男の苦しみを知っておられ、この男と出会い、関わり、救い出すために来て下さったのです。

男に取りついた悪霊は、まず、やって来たイエスさまとの関わりを拒否しました。28 節に、悪霊はイエスさまを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないで欲しい」と言った、とあります。この「かまわないでくれ」と訳された言葉は、「わたしとあなたと何の関わりがあるのか」という意味の言葉です。神の子と関わりたくない。悪霊に支配された男の口は、そのような破滅へ向かう言葉しか語れません。自分の本当の言葉、救いを求める言葉も、語れなくなっているのです。

イエスさまは、名を尋ねられました。悪霊は「レギオン」と答えました。

この問答は、イエスさまと悪霊との戦いなのでしょう。いや、これは戦いとさえ言えないものです。イエスさまは、最初から圧倒的に勝利しておられるのです。この力ある神の御子が来られたなら、悪霊は無視することも出来ず、ひれ伏して、ただ滅ぼすことはやめて欲しい、底なしの淵へ行けと言わないでくれ、せめて豚の中に入れてくれと、懇願するしかありませんでした。そして、イエスさまはそれをお許しになったのです。

悪霊は男から出て行き、願い通り豚の群れに入りました。この豚は崖を降って湖になだれ込み、おぼれ死んだ、とあります。豚の群れを一瞬で死なせてしまう悪霊です。そのような強力な悪霊の力から、男は救い出されたのです。

ここでは、イエスさまの圧倒的な支配と、神の子の権威が示されています。イエスさまは、悪霊の支配からこの男を取り返し、ご自分のものとなさったのです。この方だけが、すべてを支配なさる、わたしたちのまことの主であると、聖書は告げています。

男のように、多くのものに心を支配され、罪に陥り、駆り立てられ、引き回されるわたしたちです。しかし、イエスさまは、わたしたちを救いに来て下さいます。罪の支配から解放し、滅びの中から救い出し、ご自分のものとして下さいます。自分ではどうにもならない罪を、この方が解決して下さいます。

わたしたち一人一人を見出し、出会い、関わり、救うために、イエスさまは来て下さいました。神の子であるこの方が、すべての人を罪から解放するために人となり、向こう岸どころか、天から降ってこの地上に来て下さり、ご自分の十字架の血と復活によって、罪の赦しを与えて下さったのです。罪と死の支配から解放して下さいました。

そしてこの救いは、イエスさまのことを全く知らなかった、異国の地ゲラサの男が救われたように、異邦人にも、世界のすべての人にも及ぶ救いです。

### <正気になって>

さて、37 節には、男は悪霊を追い出してもらって、「服を着、正気になってイエスの足元に座って」いたとあります。「足元に座る」というのは、弟子入りすることを意味し、師匠の話を聞く姿勢のことです。

大切なのは、ここです。救われる、というのは、単に悪霊が出て行った、ということではありません。イエスさまの弟子になる。イエスさまの言葉、神の言葉を聞いて生きる者になる、ということなのです。神さまの愛の語りかけを聞くこと。罪の赦しの宣言を聞くこと。そして、神さまとの関係の中で、恵みに生かされている自分を知る、ということなのです。

そして、イエスさまと共に生きるということなのです。家でも、町でも、墓場でもなく、イエスさまに従っていくところにこそ、自分の本当の居場所があると、知ることなのです。

#### <周囲の人々>

さてしかし、物語の登場人物は、この男だけではありません。

悪霊によって死んでしまった豚を飼っていた人たちがいました。彼らは、この出来事を見て逃げ出し、町や村に知らせました。

そして、この出来事を見ようとしてやってきた町や村の人々がいました。彼らはやってきてイエスさまと、その足もとに正気になって座っている人を見て、恐ろしくなった、とあります。彼らは、かつて悪霊に取りつかれていた男が正気になっていることを、良かった、と喜んだわけではありません。豚もたくさん死んだ。ただただ、恐ろしかった。それをまた、ゲラサ地方の人々に知らせました。

そして、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたい、イエスさまに願ったのです。

「自分たちのところから出て行ってもらいたい。」これは、「かまわないでくれ」「わたしたちに関わらないでくれ」と叫んだ悪霊と全く同じことを言っているのではないのでしょうか。

ゲラサの人々が、この男の回復や共同体への復帰を喜んだ様子はまったくありません。男を今更受け入れる気になれなかったのかも知れません。生活の糧であった豚が死んだことの方が、大ごとだったのかも知れません。彼らは男と豚の奇怪な出来事に、ただ恐怖を感じたのです。恐怖に支配され、イエスさまが自分たちに関わることを拒否したのです。

わたしたちはここにも、自分のことしか考えられず、隣人を愛することが出来ない、人の深い罪の姿を見ます。恐れに支配される、弱い人の姿を見ます。そして、それはわたし自身の姿であるかも知れません。わたしたちは、この一人の男であり、またゲラサ地方の人々の一人でもあるのです。

#### <家に帰りなさい>

自分を救って下さったイエスさまを、自分の町の人々が追い出そうとしている。救われた男は、一体どのような思いでこのやり取りを見ていたのでしょうか。

ゲラサの人々の願い通り、イエスさまは舟に乗って帰ろうとされました。イエスさまは、

このゲラサの人々を見限られたのでしょうか。彼らの態度にあきれて、見捨てられたのでしょうか。そうではありません。

イエスさまは、この悪霊から救われた男を、ゲラサの地に遣わすことにされたのです。

38 節で、悪霊どもを追い出してもらった男は「お供したいとしきりに願った」とあります。純粹に、イエスさまと一緒にいたいと願ったのかも知れません。一方で、このゲラサの地では、やはり自分に居場所はないのだと感じたのかも知れません。

でも、イエスさまは同行することをお許しになりませんでした。そして、男を自分の家に帰されたのです。イエスさまはこう言われました。39 節「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」

イエスさまは、墓場に住んでいた男に、家に帰りなさい、と言われたのです。男を鎖や足枷で縛り、最後には関わりを絶った人々に、イエスさまがなさったことを、ことごとく話して聞かせなさい、と言われたのです。

どうして主イエスは、一緒に行くことを許して下さらなかったのでしょうか。イエスさまの弟子たちは、家族を置いて、家を捨てて従ってきています。それに、この男にすれば、家を捨てるより、家に帰ることの方が、辛いことだったかも知れません。男の家族からしても、この男は汚れた霊に取りつかれ、恐ろしい力で暴れ、たくさんの人に迷惑をかけた。そして墓場という気持ち悪い所に住んでおり、まさに死んだも同然だった。しかも人々の話しでは、汚れた霊を追い出してもらう時に、豚の群れを死なせたと言う。家族にとっても、男が帰ってくることは、喜びよりも、困惑や恐れの方が大きかったかも知れません。

しかしイエスさまは、救われた男を家族へのもとへ帰されます。しかも、ただ帰すのではありません。「神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」と、男のなすべきことを命じられたのです。神の救いの知らせを告げるために、家族のところへ行きなさい、というのです。イエスさまは、ご自分の許から、男を彼の家へと遣わされたのです。

男は、単純に一緒に行くことを断られたわけではありません。男はイエスさまのもとに、本当の自分の居場所を得たからこそ、イエスさまによって送り出されたのです。

男はイエスさまの御言葉を聞き、これに従いました。旅に同行する、という形ではありませんが、御言葉に従うことで、これからずっと、この男はイエスさまに従い、共に歩いていくことになるのです。

男は、神に従う新しい生き方へと送り出されます。神さまとの関係、交わりを与えられた男は、イエスさまにあって、隣人とも新しい交わりを築いていくことが出来るのです。イエスさまは、男と人々との交わりを回復させようとなさいます。そして、「出て行ってくれ」「かまわないでくれ」と、神との関係を拒否した人々のためにも、この男を遣わされます。救われた男の存在そのものが、イエスさまの力を、神のご支配を指し示す存在となるのです。

男はイエスさまの言葉に従い、救いを告げるために、家へ帰ります。そして、そこでとどまらず、町中に、イエスさまが自分にしてくださったことを、ことごとく言い広めたのです。イエスさまの福音は、この男一人に留まらず、その家族に留まらず、どんどん広がっていったのです。

<わたしたちも>

わたしたちも、罪に支配され、色々なものに引きずり回され、滅びに向かい、自分ではどうすることも出来ないところに、イエスさまが来て下さいました。そして、この方が十字架と復活の出来事によって、わたしたちを罪と死の支配から解放し、救い出し、神さまとの良い関係の中に、招き入れて下さいました。

そしてイエスさまは命じられます。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。」

わたしたちは、日々出会う身近な人々のもとへ、そして、住んでいる町へ、遣わされています。神さまがわたしにしてくださったことを、救いの恵みを、イエスさまから遣わされて、語る者とされています。わたしたちの居場所は、イエスさまの足元であり、御言葉を聞き、御言葉に従って生きる場所なのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまが、罪に捕らわれ、なす術もなかったわたしたちを救い出すために、来て下さり、関わって下さり、罪と死の支配から解放して下さいましたことを感謝いたします。造り主であるあなたから逃れようとしていた者を、イエスさまの血によって赦し、神さまの恵みのご支配に生きる者、イエスさまの御言葉を聞き、従う者として下さったことを感謝いたします。

イエスさまの御許で生きるようになったわたしたちが、イエスさまがなさってくださったことを力強く証し出来ますように、聖霊によって力づけ、あなたの望まれるところに遣わして下さい。

そしてまた、一人でも多くの方がイエスさまと出会い、イエスさまに聞き従う者となる事が出来ますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン